

3 川の民俗

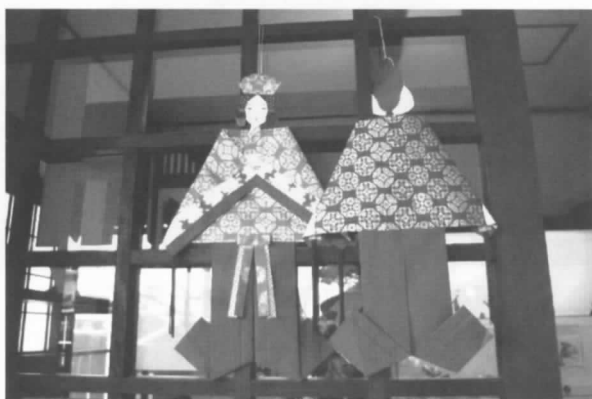
【穢れなどを運ぶ】

私たちの法人は「川の自然と文化研究所」ですから、この辺で信仰の対象でもある水が集まってできた川に話を移したいと思います。

水はあの世からやってきて、私たちの生命を支える大切なものですから、それが集まって流れる川も当然特別なものとして意識されました。川には「川の神」がいると考えられました。文字通り川の神のことですが、水の神や井戸神についてもこのように呼びます。川は河川だけでなく、泉や井戸を含めた水の集まる広義の意味に使用されるところも少なくないのです。

川およびその周囲にある川原で注目されることは、そこがあの世（他界）に様々なものを送り届ける場として意識されていたことです。

『広辞苑』には七夕送りが、「七夕の飾り竹を海や川に流すこと」と説明されていました。岩手県紫波郡紫波町彦部ではかつて、七夕



松本の七夕

は3日からで、青竹に五色の紙と紙人形を結んで軒毎のきごとに立てて祝い、7日の朝未明に川に流していました。私が子供の頃、山梨県中巨摩郡敷島町（現甲斐市）の

故郷でも七夕の飾りは集落の下を流れる川に行って流したものです。東日本の各地の七夕では、笹飾りばかりでなく、男女の人形や蠟燭^{ろうそく}をのせた船などを川に流し、その際に水浴びをするという風習がありました。それをネブタ流し、あるいはネムリ流しと呼びます。

「ねぶた」といえば、東北地方で行われる陰暦7月7日の行事が有名です。竹や木を使って紙貼りの武者人形・悪鬼・鳥獣などを作り、中に灯をともして屋台や車に載せて練り歩きます。青森市（現在は8月2～7日）・弘前市（8月1～7日、「ねぶた」と称しています）で行われるのが特に知られています。黒石市では昔、ねぶた祭りを「二星祭」「七夕祭」といつていたようです。黒石で「ねぶた」とは睡魔^{すいま}のことで、ねぶた流しは「眠気を流す」という意味があったといえます。つまり、七夕の笹などはこの世からあの世に流すもので、ねぶたも人間にとってよくない睡魔、あるいはその他諸々のよくないものを、これに寄せ集めてあの世に送り出してしまおうとする行事のようです。

これによく似たものを探すと、鳥取県で有名な流し雛があります。これは、3月3日の節句の夕方、川や海に流す雛人形です。長野県でも南佐久郡北相木村では、3月3日に家難祓^{かなんばれ}という行事が行なわれていて、季節の風物詩になっています。流し雛の行事雛はもと人形^{ひとがた}で、神送りするものでした。

同様に、夏越^{なご}しの祓えなどでは、人間の息をかけられたり、病気の箇所^{箇所}にさわったりした人形が焼かれたり、川に流されたりします。人形に穢れや病気が移らされ、封じこめられて、流されることによって、人々が身を清めたことになるのです。これにより、種々の災害を取り除こうとしたわけです。特にこれから暑い夏を迎え、疫病

が流行する季節になるので、無事に過ごせるよう祈りを行なったのが、夏越しの祓えなのです。

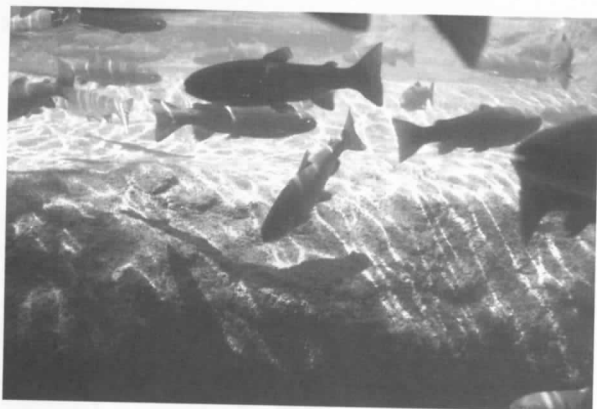
川にものを流すということで、私にとって思い出深いのは、お盆の供物を最後の日の早朝に川に流したことでした。今はこのようなことは許されなくなっていますが、皆さんの中にも経験した人が多いと思います。当然これらの供物は祖霊に捧げられたものですから、川で流される先には、祖霊の住むあの世（他界）があると意識されていました。

盆行事との関係では「流れ灌頂^{かんじょう}」があります。これは、「①「経木(きょうぎ)流し」のこと。②川辺に棚を作り布を張って、柄杓を添え、通りかかった人に水をかけてもらう風習。お産で死んだ女の人の霊をとむらうためのもので、布の色のあせるまで亡霊はうかばれないという。あらいざらし。百日ざらし。」（『広辞苑』）と説明されます。これもまた、川の水があの世界とこの世をつなぐ能力を持っていると意識されたが故に、死者の霊をあの世界へ送り届けようとする民俗といえるでしょう。

最初に神社にお参りする際の清めについて触れました。もし、人間の穢れがそのまま海に運ばれ、そこにたまっているのならば、海の魚などはもっとも穢れていて、食べることができないでしょう。でも、私たちは誰一人そんなことを考えません。日本人の大好物はマグロをはじめとする魚なのです。人間についていたはずの穢れは、この世の川や海にたまっているのではなく、我々の世界とは別の他界に行ったと信じているから、安心して魚を食べているのでしょう。

同じように七夕のお供えや、お盆のお供えも、意識としては川を通して他界に行ったと理解したのです。人間にとってよくない病気

などの原因とされたものも、それを封じ込められた人形などによって、川を通じて他界に移されたのです。



水中の魚群（安曇野市）

清めはこの世から穢れの対象を別の世界に移すこと

です。ということになりますと、水あるいは川は、人間の世界（この世）の穢れをどこか別の世界（あの世）に運ぶ輸送能力を持っていると信じられてきたはずです。

【あの世との接点】

川の水があの世界とこの世をつなぐ能力を持っているとすると、川そのもの、あるいはその周辺にできる川原にも、特別な能力や役割があると考えられてきたことでしょう。

その一つに、市場を開く場所として川原があったことが挙げられます。市場というのは、本来神と人間の接触の場で行われる、特別な行為でした。中世では虹が立ったらその場所で市が行われたり、神事などの祭礼の場、あるいは年や季節の変わり目などに市が開かれましたが、これはすべてこのためでした。『一遍上人絵伝』^{いっぺんしょうにんえでん}では信濃国伴野ともの市（佐久市）が出てきますが、これは千曲川の川原に位置していました。また備前福岡の市（岡山県備前市）も吉井川に隣接しています（『日本の絵巻 20 一遍上人絵伝』、中央公論社、

1988年)。神仏と接触でき、しかも広い空間があり、輸送にも便利な川原だからこそ、市の場所として選ばれたのでしょう（笹本正治「市・宿・町」、『岩波講座日本通史』第9巻、岩波書店、1994年）。

川原というこ

とでは、「賽さいの河原」も気になります。『広辞苑』では「〔仏〕小児が死んでから苦しみを受けるとされる、冥途めいどの三途さんずの河原。石を拾



小菅神社奥社に行く途中の賽の河原

って父母供養のため塔を造ろうとすると鬼が来て壊す、これを地藏菩薩が救うという。西院（斎院）の河原」とあります。ここには明らかに、あの世とこの世との接点として川原が意識されていたことが反映されています。

そういえば、鬼退治で有名な桃太郎は、川から流れてきた桃の中から生まれました。この意識の背後には、上流が他界として存在したことが考えられます。

川に現れるのは桃太郎ばかりではありません。川には多くの妖怪が現れました。その代表がカッパ（河童）です。同じく『広辞苑』には、カッパが「想像上の動物。水陸両生、形は4～5歳の子供のようで、顔は虎に似、くちばしはとがり、身にうろこや甲羅があり、毛髪は少なく、頭上に凹みがあって、少量の水を容れる。その水の

ある間は陸上でも力強く、他の動物を水中に引き入れて血を吸う。
河郎。河伯(かはく)。河太郎。旅の人。かわっば」と説明されてい
ました。

さらに、この世
の住人でない幽霊^{ゆうれい}
が出る場所として
は、川の畔や井戸
の周辺などもあり
ます。これはそう
した場所が他界と
の接点だと考えら
れたがためです。



川奉行の馬の尻尾に飛びついた河童の像
(駒ヶ根市)

このように川は
他界につながって
いますので、時々この世の住人ではない妖怪などとも接触できると、
人々は考えたのです。そして、こうした意識を前提にして様々な川
の民俗ができあがったのです。